

書
評

感染症薬学のひきだし

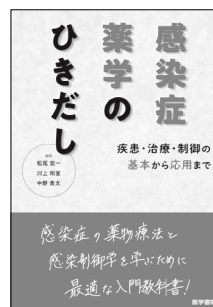
疾患・治療・制御の基本から応用まで

編：松尾 宏一，川上 和宜，中野 貴文

B5・頁 512 2025 年 04 月 定価：5,280 円(本体 4,800 円＋税 10%)

[ISBN978-4-260-05784-4] 医学書院刊

<評者> 村木 優一(京都薬科大教授・臨床薬剤疫学)



現場で実践するために必要な知識や想いが詰まったひきだし

感染症にかかわる薬剤師の仕事は年々その幅が広がっています。抗菌薬の選択や投与設計にとどまらず、感染制御チーム(ICT)や抗菌薬適正使用支援チーム(AST)の一員として、チーム医療の中で積極的な関与が求められるようになってきました。そんな中で登場したのが、医学書院の『感染症薬学のひきだし』。この本はまさに“現場で使える知識と考え方”をわかりやすくまとめた一冊で、感染症を担当する薬剤師や認定資格をめざす薬剤師、これから現場に出て活躍をめざす薬学生に強くお勧めしたい内容です。

タイトルの通り、「ひきだし」という言葉がしっくりくる構成になっていて、現場でふと迷ったときにパッと開けて使えるツール集のような感覚があります。総論、感染症、治療薬、感染制御というひきだしがあり、例えば、「この抗菌薬の注意点は何だろうか、投与中はどのような点をモニタリングすればよいのだろうか？」など臨床的な疑問が生じた際にすぐに答えにたどり着きやすいよう構成されています。

また、本書の中には、「ステップアップのひきだし」といったトピックス(コラム)が用意されており、初学者だけでなく一歩進んだ知識を身につけたい薬剤師に

とっても有益な情報が含まれているのも大きな魅力です。執筆陣には感染症薬学に精通した現場の薬剤師や研究者がそろっており、どの章も読み手のことを考えて熱いメッセージが込められているのを感じます。また、付録には筋肉注射の方法や注意点にも触れられており、文章ではわかりにくい感染症治療薬やワクチン、菌名が表としてまとめられているのも他書とは差別化できている点だと思います。

幅広く感染症治療や感染制御をカバーしているため、ボリュームとしては初学者や薬学生がいきなり全部を理解するのは少し大変かもしれません。でも医療現場で感染症の患者さんや、感染制御が必要な機会に何度も調べながら読み進めることで、確実に一歩先の実践力が身につき、読者が感染症に強い薬剤師として成長するのを後押ししてくれるでしょう。『感染症薬学のひきだし』は、感染症領域で働く薬剤師や学びたい初学者にとって心強い相棒になってくれる本です。デスクの上に置いておきたくなる、そして何度も“ひきだし”を開けて読みたくなる、そんな一冊です。ぜひ手に取ってみてほしいと思います。